

冬

『新壑』  
31-3号

路を悲惨に埋めて降る雪中をゆきて会ひたるは遠き血縁

烟るがに降る雪のゆたかに持つ融和感この冬人と親しみ易  
き

俯きゆけば貧しきもののみ集めるてストールに光る氷雨の粒

雪原に咲かさむと思ふ花の色みな暗く感慨なき冬は過去

何かふゆが欠けてるし私の冬期 忽然と耀つまよふは疎む思ひの夕  
焼

舞ふ塵のあまねく春陽に耀つまへり病夫の命今年も保たせたく  
て

華やかな愁をもつ夜の灯よ傾きゆけばゆらめく愉悦

昏冥なる季を彩りて冬の果実はかゞやけりこの瞳にのこる  
夜の舗

吾が冥さ何処より生れむ冬陽に霏する氷柱の日々<sup>ほそ</sup>決りて

人を嫉む季は吾にも寒からむどの窓も鎖されて疾き日の  
暮れ

昏き未米も知りいて自らを支えいるのみに籠る冬の季

衰弱せる吾が神経を犯しゆくは夜の顔雪の底もつ響

<sup>コーヒ</sup>珈琲色に日はたそがれて惜しみ会ふ貌と貌おぼろとなる原

春の夜

『新壑』  
31-6号

愉安いちずな象なし空に枝を張る春の樹々ら一せいに鋭  
し

吾が視野に区切られし空のみが藍堪え春はしきりと揺れ  
やすし

爽やかにわが裡潤ふ黄の果実剥かれて夜の無慙に堪ふる

地の続き有利鉄線めぐらされ吾には狭き日本となりたる

種子

『新墾』  
31-7号

軽ければ空にも舞ひて祭芽せむ掌よりこぼれて自在なる  
種子ら

偽りも評あはかれ易き季とならむ種子ら寡黙に地に埋められ  
つゝ

とりとめなき倖なれば揺れやすぎ風中に舞ふ蝶のひたすら  
も見む

雨降りていくらか潤ふ夜の道奢りいるものすばやく還さむ  
に

気重なるまゝ陽に跼むに何れの部分より解けほぐるゝなら  
む

枝折れて不具の形なす街樹あり頼らむとする人今より去  
らしめつ

愛されぬ気樂さながく希はむに黄の花腕に撓みつゝけざやか  
し

誑たぶかすごと舞ふ蝶を眼に追いつむる吾が不遇も謚かになが  
し

自由なき吾の前飛び易き構えに蝶は薄き翅をおろせり

犠性永く強いられて過ぎにきとこの日容赦なく蠅を打擲  
す

睨なみ得ぬ季と想えり身のめぐり埃立ち騒ぎくるまで乾き  
て

樂しまぬ事多き季も徐々に暮れ樹々の緑と一体の空

帰り米て静に用づるまなうらに匂い溢れて躡つは鋪の花々

貧しさの限界など識らず諍はぬときめて和らげば風何時  
よりも匂ふ

誰に頼らむあてなくて踏む土質の如湿りつゝ吾が裡冥し

耀やける夏の陽をあつめて佇つ家禽の脚吾より瘦せて

幼<sup>つか</sup>れて眼れば奢りのごとく吹く風よ季は豊に吾より逸れ  
つゝ

奢りの季と云はむ夥しく揺れつゝ風に鳴るは樹々の葉ずれ  
にして

吾が無謀の季も未だ昏れず蝶の飛翔のみがこの眠に滲みて  
しろし

肩怒る少年と短かく交はす語よあくがれのごと夏の夕焼

眼のうらに優しく蓄めて帰り来る虚飾なき彩のむらさき

萬年青

向日葵

『新壑』  
31-11号

どの花も偽りなき色に咲きて  
絢爛たり墨色の花は吾が裡  
に咲く

枯れて尚泰然と立つ向日葵の翳に  
季は萃められており

猛り吹く風に従いゆかざれば  
こころしきりと渴きゆく昼

想ふ如夜の蘭は景を垂れて  
おり今日の所業の一つにねむら  
む

吾が温みに触れきて執する蠅も  
愛さむ苦衷やはらぎてよ  
り

充たされぬ話題よりぬけ出で  
たくしきりと仰ぐ空は紺碧  
に愁ふ

秋の扉を押して新聞屋三月後の  
予約を夫に強制している

冷たくも定まれる位置を羨しみつゝ陽にさわくと墓石を  
洗う

夜より持ち来し企み窓より放つ又一日を企てんがため

評…一日一日が企みであり、又真実である。「現代に生きる人間」の逃避出来ぬ現実に真向かって、その中に自分を大切に守って生きている作者であろう。上句に情景を設定し、下句に自己を表現する手法は、一つの型に定着しているようにも思われる。

菊に触れて一日この身匂えり秋は卑近な形に美化せり

書き送る手段にて説く誤解なれば悲しみは長きひとりの  
晩秋

言葉豊かに採られいる事告げられてより勁く自らを抱く

背きし事背かれし事の何れが貧し会いたる犬が聴き目を  
見する